

古月禪材伝の研究其二

前回に続いて、古月禪材の伝記資料について読むことにする。今回は古月語録『四会録』所収の塔銘及び古月を開山とする福聚寺の庭に建つ塔に刻まれている塔銘の二種を紹介することにする。

尚『研究紀要』第三号に古月伝を整理した所、九州大学工学部の建築歴史学の研究をされている山本輝雄先生より抜刷の送付依頼の御手

鈴木省訓

紙を頂いた。その手紙の中に古月の関係の資料を送って頂き、今回の論文に使わせて頂いたことを記し、深謝する次第である。

今回で、古月禪材の現存する伝記資料の整理が終了したと言える。この伝記を中心に『四会録』の内容整理を順次行うことにする。

慈雲山、福聚禪寺、開山古月和尚碑銘

師諱禪材、字古月、俗姓金丸、日向那珂郡佐賀邑人也、母帰敬文殊而求男、一夜夢有童子与美玉嚙之、因有身、寛文丁未九月十二日降誕、幼而嬉戯不群、延宝丙辰師十歳、一日白父母求出家父母大悦遂聽、依日向松岩寺一道棟公祝髮而習業

慈雲山、福聚禪寺、開山古月和尚の碑銘

師、諱は禪材、字は古月。俗姓は金丸なり。日向那珂郡、佐賀利邑の人なり。母は文殊に帰敬して男を求む。一夜、童子有って美玉と之を嚙むを夢む。因って身有り。

寛文丁未、九月十二日降誕す。幼にして嬉戯は群せず。

延宝丙辰、師十歳、一日、父母に白して出家を求む。父母大いに悦んで、遂に聴く。日向の松岩寺、一道棟公に依って祝髮して業を習う。

十七歳而閱楞嚴經、大感激、誓依因仏戒、既超弱冠徧遊諸師之門庭、後見豐后賢巖悦公、勇猛精進、寢食俱忘、脇不着席、有年于茲、偶一日辞悦公東奔西馳、竟寓紀南海藏寺矣、大光英山哲公既老、宝永甲申秋特馳使於紀南迎師、々々遂帰、大光在補局及四年、不厭形骸、土木勞專事修造而百廢俱興

丁亥冬、哲公示寂、師承檀命、董大光嗣法一道棟公、次歳、新結茅庵、号知又軒、竊計為終焉之地矣、曾發書写大般若經願、庚寅秋始業、壬辰夏六百卷卒業、雖有助筆輩師志広大可知也、拝請大藏經興建藏殿雖有施主非師夙福孰能如是耶

享保戊戌春 嶋津惟久公以廩米五十石及山林若干寄附知又軒、庚子春師退居知又軒而不許女人入門、丁未冬有惟久公命修拓知又軒而為寺、殿堂廊廡稍備、天寿山自得寺是也、以師為開山夏冬安居循叢規、已酉八月、自得寺偶遭回祿、唯存僧堂而已也、未幾寺宇咸復興而勝旧者偏依大檀越之外護也、師福亦不可測矣、寛保癸亥秋 頼僅公發興建密願道場誓而降命、余將請師為開山然寺宇未始工。

十七歳にして『楞嚴經』を閲し、大感激し、誓つて仏戒に依因す。既に弱冠を超え、徧ねく諸師の門庭に遊ぶ。後に豐後の賢巖悦公に見え、勇猛精神し、寢食俱に忘じ、脇を席に着けず。茲に年有り、偶々一日、悦公を辞して東奔西馳し、竟に紀南の海藏寺に寓す。大光の英山哲公、既に老ゆ。

宝永甲申の秋、特に使を紀南に馳して師を迎う。師、遂に大光に帰り、補局に在ること四年に及ぶ。形骸土木の勞を厭わず。専ら修造に事す。而して百廢俱に興る。

丁亥の冬、哲公示寂す。師、檀命を承けて大光を董す。法を一道棟公に嗣ぐ。

次の歳、新たに茅庵を結び、知又軒を号し、竊かに終焉の地と為すを計る。曾つて『大般若經』を書写の願を發す。

庚寅の秋 業を始め、壬辰の夏、六百卷の業を卒える。助筆の輩有りと雖も、師の志、大いに知る可し。大藏經を拝請し、藏殿を興建す。施主有りと雖も、師の夙福に非ず、孰れ能く是の如きや。

享保戊戌、春、嶋津惟久公、廩米五十石及び山林若干を以て、知又軒に寄附す。

庚子、春、師、知又軒に退居して、女人の門に入るを許さず。

丁未、冬、惟久公の命有り。知又軒を修拓して寺と為す。殿堂の廊廡、稍く備う。天寿山自得寺是れなり。師を以て開山と為す。夏冬の安居、叢規に循う。

故甲子春、計設一会於梅林決百事於会中也、余蒙命不勝隨喜、遂馳使修書敦請師、々笑曰老懶日加有何頼、孰循之耶、使曰不敢歸、屢請不已師拄応請

於是延享甲子春、迎師於梅林 公或入寺聞法、或迎城中展待 公手賜菜具也、師於梅林法施三旬有余、此時相土引繩定寺基毘山号寺号慈雲山福聚寺是也、相土日偶有天露、落師膳三滴目結成小顆、其色如鉛錫、有司収白 公々以為師高德所感也、会終而臨辭歸賜贍儀若干、從者一々賜贍儀師發梅林也、有司或出送于寺或走送于遠或騎或步、厚其礼余類可知咸出 公深旨者也

已酉八月、自得寺、偶々回祿に遭う。唯だ僧堂を存するのみ。未だ幾ばくならずして、寺宇咸く復興す。而して旧に勝ること、偏えに大檀越の外護に依るなり。師の福、亦た測る可からず。

寛保癸亥の秋、頼僮公、密願道場を興建し、誓いを發して命余に降う。將に師を請し開山と為さんとす。然るに寺宇、未だ工始じまらず。

故に甲子の春、一会を梅林に設け、百事を会中に決するを計る。余、命を蒙る。隨喜に勝らず。遂に使を馳せ、書を修む。敦く師を請う。師、笑つて曰く、老懶日に加う。何んの頼り有る。孰か之に循うや。使曰く、諾せず。敢えて歸らず。屢々請いて已まず。師、請拄りて請に応ず。

是に於て、延享甲子の春、師を梅林に迎う。公或いは、寺に入り法を聞く。或いは城中に迎え展待す。公、手づから菜具を賜うなり。師、梅林に於て法施三旬有余。此の時、土を相て繩を引き、寺基を定む。山号寺号を改む。慈雲山福聚寺是れなり。土を相る日、偶々、天露有り。師の膳に落ちること三滴目、結んで小顆と成る。其の色鉛錫の如し。有司収め公に白す。公以て、師の高徳の感ずる所と為すなり。会終わり辭歸に臨み、贍儀の若干を賜う。從者一一贍儀を賜う。師、梅林を發す。有司、或いは出でて寺に送り、或いは走つて遠に送り、或いは騎り、或いは歩く。其の礼に厚く、余類は知る可し。咸く公の深旨を出だす者なり。

從甲子至己巳中間 公屢馳小吏於日州賜師厚貺若干、師亦屢馳介僧於米府其幣物 公召介僧於城中親自詢師安否矣、特寫師壽像二幅賜自得寺及福聚各命師自讚也、慈雲山開土際一白狐一白蛇出丁從屢見之、余修書告之師、々謂此吉慶二事

公聞之前所謂露結成顙与此二事合稱為慈雲山三吉祥

寬延己巳、公經營福聚寺而十月迎師於梅林 公或入寺或迎城中對顏、或迎花畑殿中賜嘉膳、且永世二百五十石寺產之印證 公手賜師而拈吉進山命公族有馬右膳代令門迎、官吏警蹕前後厨吏當弁齋食、法規攀例祝香諸山同來賀、爾後凡百循叢規

庚午春、公命有司建禁制札及禁酒碑矣、秋師趣日州而薦先檀君諱景、師竊以謂我願還地大於此土焉 嶋津忠就公亦頗有投轄情、于時 頼僅公在江府已察彼旨遠命国老令迎師、々願其礼厚其信深不得已告再来之状矣

正法闔山諸老、欲勸師視篆花園奉 天敕 頼僅公亦專其志、師敬聽曰

甲子從り己巳に至る中間、公、屢々、小吏を日州に馳せ、師の厚貺若干を賜う。師、亦た屢々、介僧を米府に馳し、幣物を貢ぐ。公、介僧を城中に召して、親しく自ら師の安否を詢う。特に師の寿像二幅を写し、自得及び福聚に賜う。各々師に命じて自ら讚す。慈雲山の土を開く際、一白狐、一白蛇出で、丁徒屢々之を見る。余、書を修し、之を師に告ぐ。師、此れ吉慶の二事と謂う。公、之を聞く。前の謂う所の露結顙と成ると此の二事と合し稱して、慈雲山の三吉祥と為す。

寬延己巳、公、福聚寺を経営す。而して十月、師を梅林に迎う。公、或いは寺に入り、或いは城中に迎え対顔す。或いは花畑殿中に迎え、嘉膳を賜う。且つ永世二百五十石の寺産の印証、公、手づから師に賜う。而して吉を拈び山に進む。公族の有馬右膳に命じ、代つて門迎せしむ。官吏、前後を警蹕し、厨吏、齋食を當弁す。法規、例に攀じ祝香す。諸山同じく來賀す。爾後、凡百、叢規に循う。

庚午の春、公、有司に命じ、禁制札及び禁酒碑を建つ、秋、師、日州に赴く。而して先檀君、諱景を薦む。師、窃かに以謂らく、我れ願わくば、地大、此の土に還らん。嶋津忠就公、亦た頻りに轄を投ずるの情有り。時に頼僅公、江府に在り。己に彼の旨を察す。遠く国老に命じて、師を迎えしむ。師、其の礼厚く、其の信深きを顧る。已むを得ず、再来の状を告ぐ。

正法闔山^{こう}の諸老、師を勧めて花園に視篆し、天敕を奉ぜんと欲す。頼

涼德殊衰老、豈費千金紫飾腐躬耶、吾山代々以黑衣長老為主、是予所希竟不從也

辛未春、師歸福聚、四月偶示微疾、一日率執事及侍者登東丘以杖畫地曰、崦嵫已逼余暉無幾、其塔吾于茲而名寂照焉、若或分骨自得寺亦佳乎、大夫聞此事大驚命衆医診、之加之屢馳小吏達 公々遠命国老別令侍兩医、且命有司某甲令執病中諸事

五月廿四日、書辭世偈二紙而囑鎮福聚及自得、廿五日晨、使梁溪興公詣太宰府廟代謝現世護法神恩、午時聚衆遺誠告辭垂子中刻泊然入寂、世寿八十五、依法荼毘、得舍利十余顆、方葬儀紫雲出東而成蓋、及畢收西也諸有司及小吏出警固之、公賜賻儀及香儀若干也

師、始住大光終福聚、中間四十余年、鉗鎚衲子利濟士庶者不可拳計、應諸刹請提唱法要者其数及歲月等具不記矣、師也生而不生滅而不滅、可謂禪林之軌範也、師之道不可以闕闕師之德不可測量、亘万世而不遷者其道德乎

僮公、亦た其の志を専らにす。師、敬聴して曰く、涼德、殊に衰老す。豈に千金を費やして、腐躬を紫飾するや。吾が山、代々黑衣の長老を以て主と爲す。是れ予の希む所なり。竟に従わず。

辛未の春、師、福聚に歸る。四月、偶々、微疾を示す。一日、執事及び侍者を率いて東丘に登り、杖を以て地に画して曰く、崦嵫已に逼り、余暉幾無し。其れ吾れを茲に塔し、寂照と名づくと。若し或いは自得寺に分骨するも亦た佳し。大夫、此の事を聞くに大いに驚き、衆医に命じて之を診る。加之のみならず、屢々小吏を馳し公に達す。公、遠く国老に命じて、別に兩医を侍せしむ。且つ有司某甲に命じて病中の諸事を執らしむ。

五月廿四日、辭世の偈を二紙に書して福聚及び自得に鎮じることを囑す。廿五日の晨、梁溪興公をして太宰府廟に詣り、代つて現世護法の神恩を謝せしむ。午時、衆を聚め遺誠し辭を告ぐ。子の中刻に垂とす。泊然と入寂す。世寿八十五。法に依つて荼毘す。舍利十余顆を得。葬儀に方り、紫雲東より出でて、蓋を成ず。畢りに及んで西に収まる。諸の有司及び小吏出でて之を警固す。公、賻儀及び香儀若干に賜う。

師、始め大光に住し、福聚に終わる。中間の四十余年、衲子を鉗鎚し、士庶を利濟する者、挙げ計るべからず。諸刹の請に應じ、法要を提唱すること、其の数及び歲月等、具さに記せず。師、也た生じて生ぜず、滅して滅せず、謂つ可し、禪林の軌範なりと。師の道、以て闕闕すべ

公、建碑欲師之道德表千古而命余為銘雖、余不敏辭、則負命失宗、不得已考師之伝記刪繁取要、而聊勒緣由而已銘曰

珠産南海、大光影清、徧投知識、磨竭純誠、嗣法一道、秦月愈明、書写般若、筆頭花生、拝請藏典、永祈昇平、深隱知又、避利忘名、不図有命、自得新成、齡超八十、化隆築城、福聚海潤、能棲鯤鯨、崦嵫已逼、落暉西傾、滅而不滅、孰問歸程、維道維德、万世以鳴

維時宝曆元辛未歲十月

現梅林鱗滔天謹撰

天壽興建開基古月禪師塔銘

禪者光_レ揚乎梁_二而律者蕃_二衍于唐_一矣、如_二晋宋_一中立不_レ倚風々乎、唯法崇敬不_レ眩_二於旁門_一矣、是故西來之標遂南山之規繩高範_二于世_一、而天開岳峙規_二于是_二焉者_一、條然_レ造古月禪師

からず。師の徳、以て測量すべからず。万世に亘つて遷らざるは、其の道德かな。

公、碑を建て、師の道德、千古に表せんと欲して、余に命じて銘を為る。余、不敏と雖ども辞す。則ち命に背き宗を失す。已むを得ず師の伝記を考え、繁を刪り要を取る。而して聊かに縁由を勒むのみ。銘に曰く、

珠、南海に産まれ、大光影清し、徧く知識に投じ、磨いて純誠を竭くす。一道に嗣法し、秦月愈々明なり、般若を書写し、筆頭花生ず。藏典を拝請し、永く昇平を祈る。深く知又に隠れ、利を避け名を忘る。図らず命有り、自得新たに成り、齡、八十を超え、化、築城に隆_{さか}なり、福聚海潤_{ふくくわう}、能く鯤鯨を棲まし、崦嵫已に逼り、落暉西に傾く。滅して滅せず、孰れ帰程を問えば、維れ道、維れ徳、万世以て鳴る。

維の時、宝曆元、辛未の歳十月

現梅林、滔天謹んで撰す。

天寿興建の開基、古月禪師の塔銘

禪は梁に光揚して、律は唐に蕃_{はんえん}衍す。晋宋の如く中立して倚らず風々たり。唯だ法の崇敬は、旁門に眩_{くら}わす。是の故に西來の標遂、南山の規繩、高く世に範なり。而して天開き、岳峙_{さばだ}つ。是の三、焉れを規_{きた}す。条然_{いた}と造ることを得るは古月禪師なり。

諱禪材本姓金氏、世家于佐江、不書其所得之系族、從_レ釈氏也、後之西帝、寛文七年始生、延宝四年始為浮圖、元禄十二載始登壇受具、年号何年某月某日化于某处、世壽

僧臘

某年某月某弟子某等

託具壽某為_二善狀_一列_二其行_一夏_二句_一勒_レ石以傳_中不朽_上、某撮_二其要者_一、告曰九師之於_レ人甚莊處_レ已至約、飲食器用必務_二寒素_一、司辰于_二三業_一御史于六根、無修而修故律貴_二大乘_一、無證而證故禪發_二大機_一

妙簡_二緇銖_一辨_二白信否_一、得_二乎此_一者雖_下條_上貫戒支_二而開_レ契_二其詞鋒未_二始迹_一也、不_レ得_二乎此_一者雖_下斟酌_上禪源_二而收_上勵其慈惻未_二始異_一也

凡抱_二負正法_一開_レ化也、四會從而度者數萬人勝事無_レ移有_レ聞彰徹毅然、佚_二老山之巔_一、乃即_二崇嶺_一是作_二叢_一宇東側海甸涌_二蜃市_一、西則澗道分_二燕尾_一、軒正對_レ此廓_二然物表_一、四方蟻聚人百_二懸剝_一岩戶_二傾泉府_一指畫斯立、加_レ工修整殿舍門廡自然扇開

諱は禪材、本姓は金氏。世に佐江を家す。其の得る所の系族を書せず。釈氏に従うなり。後の西帝、寛文七年、始めて生じ、延宝四年始めて浮図と為る。元禄十二載、始めて登壇受具す。(年号何年某月某日化于某处) 世壽 僧臘、(某年某月、某の弟子某等)

具さに寿某に託り善狀を為し、其の行事を列し、石に勒み、以て不朽を伝うるを句う。某、其の要を撮つて、告げて曰く、凡そ師の人に於て甚だ莊かに、己を處するに至約す。飲食の器用、必ず寒素に務む。三業を司辰し、六根を御史す。無修にして修、故に律は大乘を貴び、無證にして證、故に禪は大機を發す。

妙かに緇銖を簡び、信否を辨白す。此れを得れば、戒支を条貫して開き、其の詞鋒契んなりと雖ども、未だ始迹にあらざるなり。此れを得ざれば、禪源を斟酌して悛め、其の慈惻を励ますと雖も、未だ始異にあらざるなり。

凡そ正法を抱負し、化を開くなり。四会に従いて度する者、数万人。勝事に移無く、聞有り。彰徹毅然たり。老山の巔を佚む。乃ち崇嶺を即す。是れ叢を作す。宇は東側の海甸、蜃市に涌す。西則の澗道、燕尾を分つ。軒、正に此に對す。物表に廓然たり。四方より蟻聚の人、其の心百まなり。岩戸を剝り、泉府を傾け、指画し斯に立つ。工を加え修整す。殿舍門廡、自然に扇開す。

遂爾更其名曰「自得」焉、嗚呼師之往也、埋而不消名也、滅而不泯德也、遺法之存也、興師之存不殊也、以其正法眼以照破涅槃臺、則師之沒也、沒不沒也、既沒弟子輩恐其道廕、明夷於地上力疆景行也

師其存諸有所不能、揭然政乎高世之風、異乎至矣、其餘慶之使然也、咸出於自然故于自然也、豈非其天之為乎、吾不得而知也、弟子輩日宅其憂、遂相與為之茲壇、茗然東岡其崇數尺

植以松柏、丸、蓊茂然、而未下能紀其本末、一筆而表之厥徒亟、為余言、余始以弊文不敢當也、囑之愈勤無繇重拒其命、集前脩之清英為之銘詞、百歲之後如有世之君子及碩手於芟柞、則師不起滅定、一笑惡乎不破顏哉

銘曰

禪風振起	祖月照臨。	悅可群有	印開佛心。
厥聲顯揚	有鬱其馨。	惟教其圖	闔國式寧。
癯者既肥	爾功以成。	皇張吾軍	赫取其最。

遂に爾れ其の名を更め、自得と曰う。嗚呼、師の往なり。埋めて消えざる名なり。滅じて泯びざる徳なり。遺法の存なり。師の存と殊ならざるなり。其の正法眼を以て、以て涅槃の臺を照破す。則ち師の没なり。没して没せざるなり。既に没す。弟子の輩、其の道廕々、明夷の地するを恐れ、景行を力疆するなり。

師、其の存るは、諸の能わざる所有り。揭然として、高世の風を政す。異なり至れり。其餘慶の然ら使むることなり。咸く自然を出でて自然に帰るなり。豈に其の天の為すに非ずや。吾れ得て知らざるなり。弟子の輩、日其の憂いに宅んで、遂に相与え、之茲の塔と為す。東岡に茗然として、其の崇は數尺なり。

植ゆるに松柏を以てす。丸丸蓊茂す。而して未だ能く其の本末を紀め、筆いて表すこと有らざるの厥の徒亟なり。余の為に言う。余、始めて弊文を以て敢て当らざるなり。之に囑して愈々勤む。重ねて其の命を拒むに繇ること無し。前脩の清英を集め、之に銘詞を為す。百歳の後、如し世の君子有つて、碩手に芟柞するに及べば、則ち、師、滅定を起さず。一笑の惡か、破顔せざるや。

銘に曰く、

禪風振起し、祖月照臨す、群有を悦司し、佛心を印開す。
厥の聲顯揚し、鬱りて其の馨有り、惟の教え其の図、闔國式寧なり。
癯者は既に肥え、爾の功、以て成る、皇、吾が軍を張り、赫かに其の

法施 ^{ほうし} 颯 ^{さつ} 纒 ^{まき}	四處 ^{しよ} 開 ^{ひら} 會 ^{かい}	學徒 ^{がく} 來 ^き 服 ^{ふく}	緊 ^{きん} 其 ^き 是 ^し 頼 ^{らい}
執 ^{しつ} 司 ^し 壽 ^{じゆ} 天 ^{てん}	天固 ^{てんこ} 人 ^{にん} 欺 ^き	嗚呼 ^{うふ} 終 ^{しゆう} 哉 ^{かい}	奈 ^な 何 ^{なに} 乎 ^や 師 ^し
龜 ^き 以 ^{もつ} 兆 ^{しやう} 坐 ^ざ	匪 ^ひ 後 ^ご 人 ^{にん} 食 ^{じき}	惟 ^い 石 ^{せき} 巖 ^{がん}	鐫 ^{きん} 文 ^{ぶん} 以 ^{もつ} 翼 ^{よく}
載 ^{さい} 贊 ^{さん} 其 ^き 養 ^{やう}	載 ^{さい} 頌 ^{しゆ} 其 ^き 德 ^{とく}	千載 ^{せんさい} 之 ^の 下 ^か	標 ^{ひょう} 仰 ^{やう} 罔 ^む 極 ^{ごく}

無名氏撰

以上、現存する古月禪材の伝記資料の総てを読み終つたと言える。

これによつて従来の古月伝の不明な点が整理できるものと考ええる。

そこで、古月伝に対する私見を述べておくことにする。

『久留米碑誌』収録の古月の碑の説明文に、

福聚寺開山古月は、東の白隠、西の古月とならび称せられる禪林の高僧であつたと伝えられる。おそらく当寺を建立した有馬頼僅の師への崇敬と信任の深さから見ても首肯できることである。

頼僅がこの密願道場(祈禱寺)を創建した動機については、種々の憶測があるが、いわゆる有馬化猫騒動と称せられるお家騒動を考える人も多い。これは先代の則維が愛妾と謀り、嫡子頼僅を廃して妾腹の宅之進を嗣子にしようとした企画が家老たちの反対で失敗した事実を内容とするものである。この事件は他藩の場合と同様複雑であり、ここでは藩内の政治的対立や享保の農民一揆な

最を取る。

法施^{ほうし}颯^{さつ}纒^{まき}し、四處^{しよ}に会を開く、學徒^{がく}來^き服^{ふく}し、緊^{きん}しく其れ是の頼りなり。孰^たれ、壽^{じゆ}天^{てん}を司り、天固^{てんこ}く人^{にん}欺^きく、嗚呼^{うふ}、終るかな、師を奈何せん。龜^きは兆^{しやう}坐^ざを以てし、後^ご人の食に匪^ひず、惟^いだ石は巖々、文を鐫^{きん}り以て翼^{よく}く。

載せて其の養を贊え、載せて其の徳を頌す、千載の下 標仰して極むこと罔れ

無名氏の撰

どがからみ合つていた。いずれにせよ、同じ臨濟宗の巨刹、菩提寺である梅林寺と別個にこの寺を建立したことは相当の理由があつたと推される。

この一文から、まず、福聚寺が、祈禱寺であるこという。単なる禪宗寺院ではない。有馬家の菩提寺である梅林寺と福聚寺とは、寺院としての形態に違いがあると言える。つまり古月が迎えられた寺院は、祈禱を行う寺であつたのである。

白隠の高足である東嶺円慈は、初め古月に参じたのであるが、古月が祈禱ばかりしているので、がっかりしたという旨のことが、東嶺伝に見られる。この東嶺伝が言う様に、古月が祈禱に関して勝れた力を持つていたと見た場合、有馬侯は、古月の為に祈禱寺を建てたと言うことになる。又遂に有馬家を守るための祈禱寺を建立し、祈禱僧としての古月が開山として迎えられたと考えると、古月伝とは多少異なる

古月像が出てくるのである。

更に、近世臨濟禪中興の祖である白隠と並び称せられた古月禪材は、
禪僧として評価は、白隠自身が参じようとした経緯もあり、それから
見れば、禪僧としての修行もし、公案による悟もあると言える。その
様な古月に対し、有馬頼僊は、禪宗の修行道場を持った寺院でなく、
祈禱寺院の開山として迎えたのである。

これらのことから考えると、禪僧古月というより、禪の祈禱僧古月
という一面を見ることが出来る。

古月伝の整理をする過程における注意点としては、古来からの持戒
禪と言われる以上に祈禱等の儀式的な面を持った禪、これは、当時の
黄檗宗の影響によるのではないかと考えるが、古月の禪は、多面的な
特色を持つのではないかと考える。そして、これらのことは、『四会録』
中に収録される資料によって説明出来るであろう。